

## 日本と国際社会の関わり

### —歴史認識の溝〈2004年度報告〉

斎藤 純一

日本が他の国々と歴史認識の溝を埋めるにはどうしたらよいかという深遠な問いかけで始まった共同プロジェクトも既に2年目を終えようとしている。昨年の夏にミュンヘンの郊外にあるダッハウ強制収容所跡を訪れ、日本とドイツの過去に対する向き合い方、そして償い方の違いに考えさせられることが多々あった。夏の暑い時期にも拘らず親が子供に熱心に第二次大戦時の悲劇を伝えている姿を見て、ドイツが戦後国際社会で周囲の国々から信頼を勝ち得てきた理由が何となく伝わってくるようであった。

戦後のドイツの過去に向き合う姿を論じる時によく日本の歴史家の間で引用されるのが、ヴァイツゼッカー元大統領の「荒れ野の40年」という演説における以下の言葉である。

罪の有無、老幼いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。全員が過去からの帰結に関わりあっており、過去に対する責任を負わされているのであります。

心に刻みつづけることがなぜかくも重要であるかを理解するため、老幼たがいに関わりあわねばなりません。また助け合えるのであります。

問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります（拍手）。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。

ユダヤ民族は今も心に刻み、これからも常に心に刻みつづけるでありましょ

う。われわれは人間として心からの和解を求めています。

まさしくこのためにこそ、心に刻むことなしに和解はありえない、という一事を理解せねばならぬのです。何百万人もの死を心に刻むことは世界のユダヤ人一人一人の内面の一部なのでありますが、これはあのような恐怖を人々が忘れることができない、というだけの理由からではありません。心に刻むというのはユダヤの信仰の本質だからでもあるのです。(注1)

ダッハウ強制収容所跡を見学している間中ヴァイツゼッカー元大統領の「過去に目を閉ざすものは結局のところ現在にも盲目となります。」という言葉が常に脳裏に浮かんできた。日本が戦後歴史問題に関してアジアの国々と積極的に向き合ってきたことが、ドイツでの滞在を通して痛く実感できた。特に強制収容所跡を案内してくれた英国人のガイドが、「日本でも第二次大戦中に中国で虐殺や人体実験を行ったと聞いていますが、この様な収容所跡を見学して何か学ぶものはありますか？」と聞かれ、咄嗟に「戦後ドイツが周囲の国々の信頼を得るために歴史の過去というものに正面から向き合ってきた姿に日本は大いに学ぶべきものがある。」と答えた当時の気持ちは今もまったく変わっていない。一人でも多くの人々にこうした気持ちを伝えたいと気持ちを新たにした次第である。

ダッハウ強制収容所跡を訪れた後でホロコーストをある意味表象するといわれるアウシュビッツ強制収容所跡を十数年ぶりに訪れた。ポーランドのクラクフ郊外にある強制収容所跡へバスが近づくにつれて周囲の風景が重々しくなり、何かを語りかけてくるようであった。想像力を逞しくすれば、このアウシュビッツ収容所で単にユダヤ人であるというだけの理由で強制労働を強いられ、最後にはガス室へと送られた人々の苦しみや悲しみが理解できるはずである。

最近「アンネの日記」を知らない日本の若者が増えているようである。活字離れが進んでいるとはいえ世界で聖書と並んでベストセラーとされている書物を読んでいるいないということは、人間としての共通の価値基準を共有できていないとすることができるのではないか。アムステルダム市内にアンネ一家の隠れ家があるが、大きな本棚の背後が隠れ家への入り口になっていた。昼間は音を立てずに身を潜め、下の階で働く人々に気づかれないように何年も生活していたのである。外の明かりもまともに入らない狭い部屋の中で、アンネは自分の体の成長とともに、精神的に大人になっていく過程を日記という形を通して少女なりの視点で描写している。人間同士が憎しみや偏見といった感情を捨て1日も早く平和な世界が到来することを

願っていたにも拘らず、終戦まで後僅かというところでアンネはアウシュビッツ強制収容所へ送られ、短い一生を終えたのである。なぜ当時ユダヤ人であるという理由だけで罪のない人々が強制収容所送りとなったのか平和を謳歌している若い世代には真剣に考えてもらいたいものである。

普段の生活でタバコの吸殻を平気で道端や廊下に捨て、公共物を傷つけたりする行いは、遠い将来文化や習慣の違いで人間を蔑視し、傷つけるような行動を起こすかもしれないというのはあながち誇張ではないかもしれない。小さな驕りや嫉妬心、或いは偏見といったものすべてがアウシュビッツへ繋がっているといっても過言ではないのである。過去8年間にわたる専門ゼミで様々な差別や偏見の事例を出しながら訴えたかったのはまさにこうした点だったのである。即ち人間の心に時として起こる邪悪な感情が時として大きな悲劇をもたらすことがあるということなのである。

アウシュビッツ強制収容所跡を訪れる人が先ず目にするのが、入り口の門に掲げられた“Arbeit Macht Frei (労働は諸君を自由にする)”という言葉である。当時収容された人々は僅かの食料と睡眠時間で厳しい労働を強要されたのである。かつてのバラック跡を見学するとどの施設でも静寂と沈黙が支配する空間となる。多くの訪問者はこれがあのバッハやベートーベンを生み出したヨーロッパ文化の中核部で起こったことなのかと疑いたくなる。こうした狂気とも呼べる精神状態はヨーロッパ文化に昔から存在していたものなのか、或いは何らかの要因が重なり噴出したものなのかは議論が分かれるところである。

ホロコーストが引き起こされた要因としては「意図主義」と「機能主義」に大きく分けられる。(注2) 意図主義の立場に立つとヒトラーは最初からユダヤ人を虐殺するという意図を持っていたことになる。数年前に日本でも翻訳されたR・ヒルバークの「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」は意図主義の立場に立つ著作である。(注3) 一方の「機能主義」の立場に立つとヒトラーに最初から虐殺の意図があったわけではなく、周囲を取り巻く様々な要因が作用して虐殺へと導いたということになる。当時の歴史の複雑な絡み合いを考えると「機能主義」を唱える研究者も多い。自分自身ダッハウやアウシュビッツを訪れる前は、「機能主義」の立場をとっていたが、強制収容所内を自分の足で歩き回っているうちに、あのような悲劇的な出来事は最初から明確な意思がないと実行不可能ではないかと確信するに至った。

アウシュビッツ強制収容所内の女性の髪の毛を展示してあるガラスの前で何故こうした非人間的な行為が明確な意図なしにできるものなのかと自問自答してみた。

イスラエルにあるヤド・バシエムでは人間の死体から作ったとされる石鹸が展示されていると聞いているが、人間は戦争のような非常時にはどこまで残酷になれるのかと人間不信に陥ることもあった。

アウシュビッツを訪れたときにガイドを務めてくれたポーランド人女性の真摯な態度は今もはっきりと覚えている。説明の途中で「ユダヤ人はどう定義できるのですか？人種や宗教的な集団と定義する人もおりますが…」と質問を投げかけてみた。ガイドの女性は「ユダヤ人はどのような存在かということについての明確な定義はないというのが適切かもしれません。」と前置きしてから、「ヒトラーは無理に遺伝学的な見地からユダヤ人を定義しようと試みたのです。」と説明し、その場で少し考え込むように「私もイスラエルに行ったときに多くの学者からそのような質問を受けましたが、ユダヤ人についての明確な定義はないのです。」と回想していた。そのガイドは最後に一言、「かつてカトリックの尼僧でガス室に送られた人がいるのです。その尼僧はカトリックとして生活していながら、当時の遺伝学的な見地から家系にユダヤ人の血が流れているという理由でガス室送りになったのです。」と静かに語りかけユダヤ人を定義することの難しさを語ってくれた。

収容所内での展示物を見ながら傍らで日本人の旅行者が「これが本当に人間の仕業なのか？」と呟くのを耳にした。第二次大戦中の日本軍も規模は異なるが、同じような虐殺を行ったとされているのである。現代の日本人でアウシュビッツ収容所跡を見学して南京大虐殺やハルビンにおける七三一細菌戦部隊の人体実験を思い起こす人は僅かであろう。被害者という視点でものは見れるが、歴史における加害者としての視点が欠落しているのが最近の日本人の特徴のように思えてならないのである。

広島平和記念資料館では一年を通じて児童・生徒たちが平和学習をする姿が見受けられるが、加害者の視点による過去の歴史に対する反省がないことが気にかかる。同施設では先ず最初に目に入るパネルとして日本軍のアジアへの侵略を説明するパネルが僅かにあるが、その後の原爆投下に関する多くの展示物のために加害者としての日本という視点が欠落してしまうのである。果たしてこのような平和教育により健全な精神の日本人を育成できるのであろうか。かつてA級戦犯人だった東条英機を扱った「プライド」という映画が、かつての日本軍の戦争行為を美化するとして物議を醸した。確かに極東軍事裁判のやり方に関してはいくつかの問題点が指摘されている。たとえば、戦勝国の論理で裁判を進める中で、アメリカによる広島と長崎への原爆投下の責任は不問に付し、戦犯容疑者の刑罰の確定を当時あまり



技術が発達していなかった同時通訳を通して行ったということが挙げられる。通訳者の訳が明確に伝わらなかったり、上官を庇って罪を被ろうとした戦犯容疑者もいたために当時の技術ではうまく通訳できずに絞首刑となった者も多かったとの証言があるのも事実である。こうした事情を踏まえて歴史修正主義者たちは異口同音に東京裁判は戦勝国が敗戦国を一方的に裁いたものだと主張する。

ゼミの卒論でも小林よしのり氏の「ゴーマニズム・スペシャル（戦争論）」に言及する学生が毎年何人かいることは事実である。小林氏の著書は歴史を体系的に学んでいないと書かれていることがあたかも唯一の歴史的眞実のように思えてしまうのかもしれない。小林氏は若者の心に直接訴えかける手法で、母国のために自らの命を犠牲にした勇気ある先代の人々がいたことを誇りに思うようにと述べている。しかし大東亜共栄圏構想などと呼ばれるものが真にアジアの民衆が欧米列強から解放されることを願って打ち出されたものであるかは、当時の日本の植民地支配を受けていた人々の証言に耳を傾ければすぐに分かることである。数年前にベトナムから日本に留学に来ている30代の男性から太平洋戦争当時日本軍がベトナムでも一般民衆を殺害した事実を語ってくれた。戦況があやしくなると日本の軍隊は猜疑心のあまり反日と思われる人はすべて連行し、拷問し殺害したことはシンガポールの華人に対する扱いと全く同様だったのである。

個人的な体験ではあるが、今から25年前にフィリピンのホームステイ先で第二次大戦中にフィリピンの将校だった人から当時の日本軍の行為について聞かされた。しかしその元将校だった人は「いつまでも過去のことにこだわってはいならない。お互い許しあい、協力して生きていくことが大切だ。」と語ってくれた。フィリピンは熱心なカトリック教徒の多い国であるが、自分自身に宗教的な背景がなければ耳にすることのなかった貴重な証言である。

又当時東南アジアに進出している日本の企業が現地の技術発展に貢献していると教わっていたが、フィリピンで日本の企業を見学してみると、日本の技術者の説明と現地の人々の意識には大きな隔たりのあることに気づいた。或る意味東南アジアの経済発展とは表向きで、戦後の日本は自然を破壊し、大気汚染や水質汚濁などの環境公害を輸出していたと言えるのかもしれない。

自分自身の目でフィリピンでの体験を脳裏に焼き付けていたので、後になって「朝鮮半島における日本の植民地支配は朝鮮の近代化を促した。」という議論を耳にしたときは何か不自然な印象を受けた。他人の家に放火した後で近代的なビルを建設してやったのだから感謝せよと言っているような稚拙な議論である。当時朝鮮半

島に建設した鉄道や橋、そして工場や病院といった施設は現地の人々のためというより日本国内の産業発展のために建設したのであり、国内で極貧に陥った人々を現地に送り込むという日本政府の目論見があったことを忘れてはならない。又近代化という定義に関しても東アジアで逸早く西欧の文明を取り入れた日本と東アジアの他の国々とは大きく異なるということが挙げられる。換言すれば、当時の日本は自国の論理を東アジアに押し付けてはならなかったのである。(注4)

最近東アジアにおける日本の立場は悪化しているようである。新聞を見ても竹島の領土問題や第二次大戦中のアジアにおける植民地支配に対する心からの謝罪といった懸案事項が大きく取り上げられている。ドイツが戦後一貫して周囲の国々に示してきた謝罪の念を日本も同じように示さなければ日本はますます東アジアで孤立していくことになるであろう。第二次大戦で日本は敗戦国ではあってもアジアにおいては加害者の立場にあることを忘れてはならない。「過去のことは過去の事として水に流し、未来に繋げていこう」などと加害者でもある我々日本人は決して言うてはならないのである。

#### 注

- (1) 「荒れ野の40年」岩波ブックレットNO.55、1986年、16頁—18頁。
- (2) 栗原優「ナチズムとユダヤ人絶滅政策 —ホロコーストの起源と実態—」ミネルヴァ書房、1997年、6頁。
- (3) 同上、6頁。
- (4) 「日本の植民地支配」岩波ブックレットNO.552、2001年、4頁—7頁。